

三河 アララギ

2026年 令和8年3月 弥生
やよい

三 月 号

第七十三卷 第三号



ニューヨーク日記(233) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

BAD BUNNY BOWL

Blue Shoe Diaries



私はスーパーボウルをハーフタイムショー目当てで観るタイプです。スーパーボウルはアメリカ最大のアメフトのイベントで、毎年ほぼ“国民的行事”のように全米中がテレビにかじりつく一日。今年は、試合そのもの以上にハーフタイムショーが話題をさらったと言ってもいいかも。それも納得するほど特別で、心から感動できるショーだった。スケールも、意味も、どこか“必要”だった気がする。史上最多となる1億2,820万人が視聴し、世界中がその13分に注目。世界が、そして特にアメリカが重たく、分断を感じる空気の中で、**Bad Bunny**が届けたのは、まっすぐな喜び。誇り。体が自然と動いてしまうリズム。ただのパフォーマンスではなく、カルチャーそのものの祝福であり、愛の表現でした。あの13分間、世界は少しだけ軽くなった気がする。

I'll admit it, I'm one of those people who watch the Super Bowl primarily for the halftime show. And this year's felt different. Bigger. Necessary. It became the most-watched halftime show in history, with 128.2 million viewers, and it's not hard to understand why. At a time when the world, and especially the U.S., feels heavy and divided, **Bad Bunny** delivered something expansive: joy without irony, pride without apology, rhythm that made you move whether you planned to or not. It wasn't just a performance. It was cultural affirmation. It was celebration. It was love at stadium scale. And for thirteen minutes, the world felt lighter.

歌集 わが冬葵

御津磯夫

あはあはと疊みに射せる月かげをはるかで見つつまだ這ひゆかず

夏ぶとりなどは水腫すいしゅに同じくて疲労より老より來る病なり

ダイヤガラスの扉に夕べのかがやきの黄金になりぬまた夜が來る

犠牲者はつねにか弱きものにして天の聲など聽く人はなし

書きしるす夢さへも見ず衰へて籠るいく日に野分のさわぐ

わがやまひ治りしとはずけふも診るわが患者らは老いて逞し

東北よりはしり來たりてわが腕に子はためらはず點滴の針

子ら三人醫師なりこもごもに診斷す醫師なるわれの老いの病ひを

折々にまなこをひらき黄に染みし手の甲を見るてのひら掌を見る

鳥取の梨の青きも汁に飲み心はあせる聲にいだして

歌集 「草々」

今泉 米子

仕事着のGパン褪せてパリーよりカメラマンの子の歸り來りぬ
磯の匂ひなき地中海に沿ひゆきて撮りつつ黝く日焼けして來る
カダケスの海に日焼けして歸り來し子に食はしむる冬瓜の汁
外國より歸りても話少なき子よ菲さく畔のみちを連れだつ
地中海の空氣を寫し來しといふ餘韻のごとき微熱をもちて
先代よりの處方の藥吞ましむるわが家に休む子の二三日
新しく毛の靴下を買ひに來つ受賞の式にゆかむ夫に
中邊路をよぼろ丁くるしみ行きけむを今日満員電車にわが立ちつづく
くたぶれて着きたる宿はエレベーター乗替などして五〇一五號室
夜つきたる五階の五〇一五號室窓の暗やみに立つ楠の幹の群

アララギ歌集IV

大須賀寿恵

秋雨にものみな濡れて柏の葉濡れ光る葉の紅葉うつくし

尺八寸の鉢に素枯れ高砂百合風ぎたる夕べ種子ふりこぼす

碑をめぐる白砂を掃き清む箒目の立つを樂しみとして

夕べには雨にならむと佇つ庭に鶯笛鳴く二声ばかり

素枯れたる鉄線の蔓を切り捨つる蔓は生きをり花芽をつけて

水苔のままに春雨の中におかむ田峯の山のかたかごの花

花首を傾けながら堅香子は淡紫に匂ひたつらし

あくがれは斯のごときか背の高き女子大生の亜子ちゃんに逢ふ

曇りつつ降りつつ今日の夕べには洗濯物が乾きてをりぬ

葉の蔭にひそかに結べる木瓜の実の皺立ちながら黄ばみ始めぬ

三河アララギ歌集Ⅲ

夏目勝弘

舗装路に転びて素早く立ちあがるあたり見回す己が寂し

玄関の狭き土間には今日もわが家族三人の履物がある

一日が終わりましたと宿直室に話しかくると独言いふ

平凡に闇は天井より広ぐるを火のなき炬燵に寝転び眺む

インクもて引きたる線を越えられぬ糠子を愚と我には言へず

キリモミに散りくる春の竹の葉のなべては土に落つるにもあらず

平凡に夜となりたりサンゴジュの下の落葉に落葉する音

我の眼に見えたるものに闇もあり目覚めて再び眠るときのま

足下より己の影が黒々と伸びてゐたるは安らぐものよ

かぶりつく桃より落つる汁を受く掌はおのづと凹へこみをつけて

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

盆栽の水のやりかたも父は書きて梯子段の裏側に貼りておきにき

丸鉢と四角鉢とがありて鉢なりに水やれとも書きてありにき

風呂の栓には螺旋も何もないからと父のふるへし文字のこりをり

胃を切りて尿閉にいたく苦しみし父よかの日にわが怠りし

ひとこともことば交はさず父をおきて舞鶴の駅に向きて歩みき

深き深き眠りとばかり思ひゐて父のいのちをつゆ疑はず

五分でも顔を見せよと病む父はわれにいくたび言ひにしものを

一秒のなほある命あらしめむ無意識の父に点滴はじまる

父の机小さき木机わが貰ひ読まずもの書かず一周忌きぬ

いまはただ自然じねん法ほう爾にといふことは信じてをらむ梅雨の明けつつ

大場昇三無口無表情の子なりしが形原の海に行方知れずも

恐しきところと人のけふも言ふ音羽橋下流の海の三角州

音羽橋の堤防長しゆきゆきて夏のみ昼の日の白く照りつける

女教師のわれにひそかに渡しゆく亡き子の写真の修学旅行

時々水怠りて風知草の二鉢小さき穂のそよぐかな

知りつつゐたい

東京 今泉 由利

太陽に向かひて花開く極楽鳥花今日は私に向かひて咲くよ

カタカゴ・ヤマスケ・ワスレナグサ・私の一世をユリ科につなぐ

ただに闇氷河の軋む音のみ聞こえ地球の上に命のあるを

まん円の月の明りのさえざえと一万メートル上空飛行機の窓

ゆらゆらとゆらぎてをり太陽光大西洋上飛行機の窓

方角は確かではなきままに飛びゆく方を信じています

地球なる半円程を飛行するマイアミビーチに吾娘らのゐて

地球なる距離の範囲を行き来せりこの年もまた終り近づく

落付きて地球に甘え地球のままに生きこしことよ地球に住まふ

見渡すは赤々赤々ひたすらの赤三百万本ただただ赤し

紫色緑色を内に秘め笹紅色の分折は光沢供なう緑色

よろい竜よジュラ紀から白亜紀にかけて繁栄したと草食竜

富士山の状境にして忍び見ゆほのかに白し初冠雪を

チングルマのほほけはじめるときにしてもうすぐ冬の来たれることを

人間の、やさしさと、親しさと、安心と、よろこびだけを、知りつつゐたい

虹

豊川 安藤 和代

今朝迄の雨上りしか本宮の峰覆いたる雲の切れゆく

朝焼けが弓張山脈染める頃街の灯の眠り始めん

今まさに昇らんとする朝の陽に事なき今日を祈りておりぬ

この空のどこかに息子こゝろもいる嫁もいる今朝の西空白き月あり

愛も恋もどこにも燃ゆるもの無くて窓辺に真紅の薔薇を飾りぬ

絹のごと雨柔らかかに濡らす窓大好きだった人を恋しむ

「工事中」札立てホームの前の道ダンプシャベルカー人の忙しき

休日は職員さんの車なく駐車場には冷えし風吹く

畑仕事する人見ゆる北の窓手を振りくれて心ホカホカ

広き畑発芽緑を窓越しに何野菜かと友と語りぬ

友からの缶コーヒーは冷えし日の心を体を温めてゆく

「ちゃん」つけて吾れ呼びくれし人も亡く古里の川浅く流るる

冬空の南東に大き虹の橋全身喜びに包まれてゆく

〴〵何事ぞ〴〵鎮守の森に群なして鴉が騒ぐ冷えし夕暮れ

仕事なのか遊びか学びか真夜中の国道華やかライトが続く

ロウバイの花

豊川 山口千恵子

切れかけて点滅続ける街灯よはかなき命を保たむとする如く

ロウバイの花が咲きたり小枝二本切りて持ち行く墓華として

腕伸ばしロウバイの小枝切らむとす垣根の廻りの香り立つ中

ロウバイと水仙かすかに香りゐる朝起き出で玄関明けるとき

しおれたる窓辺に置けるシクラメンに水をそそぎぬよみがへり来よ

玄関の日だまりに猫のうずくまるわれの姿に今日も逃げゆく

わが前をゆっくり横切りてゆく猫今日はトラ猫毛並美しき

わが部屋の一輪ざしにさす小枝の苔の椿その花開く

玄関の脇に枯れし茅の群無住の如き新しき家

媪一人住みぬし家の毀たれて新しき家三軒の建つ

忙しく朝には人の出入りして夕べには建ちをり新しき家

水仙の花群なめて風の吹く冷めたき風吹く睦月の尽

寒椿の花びら風に吹かれ寄る玄関出づる今朝もまた

大空をゆったりたゆたふ鳶一羽風向う道にしばし見上ぐる

ふりそそぐ朝の光のあたたかし友の家のカーテンしめられしまま

明石海峡大橋

蒲郡 杉浦恵美子

正月は何方も来ぬゆゑおせち料理我が為になど作る気はせぬ

我が家の習はし正月箸袋私の署名のみ溜まる抽斗

さは云へどせめて正月箸袋威儀を正して墨書せんとす

今まさに明石海峡大橋を渡れり日帰りツアーのバスが

大橋が設計時より一米長いは地盤のずれによるとぞ

明石海峡大橋竣工震災の後だったのか往時は隴

バス旅の隣席のひと震災時神戸に住めりとぼつんと言へり

子供たち地震直後は一切の表情消えぬとそのひと言へり

聞くほどに重い話の窓外は両側海の淡路島南端

我と同じ一人旅なる隣席のひとと語らふこの邂逅よ

街なかの建物解体よく見れば作業員たち皆外国人

建物の解体作業はクルド人かトラック尾張ナンバー見れば

この国が今まで通りであるために外国人が下支へする

島国に生まれ育ちし我等にて共存すること如何に難きか

さは言へど相互理解が求められる心の鎖国解かねばならぬ

年新た

大阪 伊藤 忠 男

季節^{とき}忘れ日差し和らぐ温もりも年の瀬なりて心急くなり

聞きなれし遠き鐘の音かすかにて年は暮れ行く山里の夜

年新た親族寄りて祝い酒結ぶ絆の結び直さむ

この世にぞまくら高くし眠る日の来むを願ふは贅沢ならむ

海の道守り見つめる金刀比羅の神は今でも山の上なり

鏡餅開けてぜんざい待ちわびる^{いと}幼けなき日の味覚忘れじ

踏み台に乗りて外さむしめ飾り照らす^{あかり}灯や夕焼けの空

梅の花鶯鳴くを待たでて早く咲くとも春はまだなり

西よりの風に黄砂の色ありし急ぎて衣服部屋に移さむ

零下なる気温にこの身針供養刺さる寒さの痛みこらえむ

冬の日に春のけしきの交じり来て霞たなびく昼下りかな

大寒と聞きて身構え家を出づ手袋はめて襟を立てたり

甘酒を手にししましも息抜きやしじまに湯気の漂ひにけり

吐く息の白さに寒き朝を知る空澄み星のまたたけにけり

働いて働いてまた働かむ働き過ぎしエアコンならや

居間改変

豊川 白井 信昭

庭中の南隅にてわが植えし高野槇一つ跡形もなし

稍かれ円錐の形整いて青青伸び立ちて美しかりけり

洋間にて息子の机また椅子と三十五年ありそのままにして

今の度は机と笥子改めて息子中味を整理し我に

間口なして洋間の境若嫁はビニールの暖簾のれん付けてくれたり

年の暮れ今日という日の五人たりして机の整理めどがたちたり

仮置きと六畳一間位置しめてテーブル・ソファなどたちまち山に

玄関に一際^{ひと}目を引く北斎の神奈川沖合波裏の絵^え画

待ち待ちて軽トラ一台借りられて今日という日の廃棄と購入

我と妻災害リスクありながら六畳一間生活用具おく

巨大地震『南海トラフ』起きうれば一体どれだけ持ち出せるのか

冬晴れの擁壁の下空洞にコンクリようやく詰め終わりたり

二つ目にコンクリの束^{つか}一つ交い四十五センチ高水抜き三つ目を

大寒に豌豆一株わが境白き一花咲きておりたり

窓側に息子の机再びを気持ち新たに短歌書き上ぐる

隅田川七福神めぐり 埼玉 矢崎 直人

隅田川七福神をめぐりゆくスカイツリーの冬晴の空

初詣行事の隅田七福神スタンプラリーを色紙に集める

隅田川七福神の福詣江戸の終はりに盛んになりぬ

隅田川七福神の墨東の文人墨客粋な通人

多聞寺の茅葺屋根の山門の大火震災戦火を遁れ

木母寺もくぼじの梅若塚の隅田川文化のゆかり古く業平

寿老人白鬚神社の大明神白鬚長寿の神に祀られる

百花園集ふ風流達人の七つととのふ機転利かせて

福祿寿百花草花囲まれて百家の名跡絶ゆることなく

家光の腹痛治す長命寺井戸の薬に弁天の蛇

桜もち正岡子規の遊びたる墨堤現在も繁盛の店

布袋尊咳の爺婆石像の風邪除け民の願う信仰

越後屋の大國恵比寿うつされて三囲神社にめぐりつきたる

三囲にひそりと富田木歩の碑震災逃げ遅れ圧死の俳人

隅田川七福神の吟行で俳句を詠んで初春ととのふ

『いよよ中』

西浦公民館 いーはとぶ

クラス会これにて最後となるらしく赤き薔薇咲く服を選べり

鈴木美耶子

学び舎のメタセコイアの巨き樹下六十年経て今佇めり

今日の日はさやうなら歌ふキャンパスの噴水前を去りがたき

いつまでも続いてゆくものと思っていたクラス会♪いつまでも絶えることなく友達でいよう♪区切りの時となり。

シヨボシヨボと温き雨降るこの週末みんながみんな予定あるらし

牧原正枝

年末のポン酢仕込みは静かなり流れ作業の大人の仕事

登下校小中学生は各自とふ回覧板は通達のごと

孫が大きくなり恒例行事も楽しめず西浦は子供が少なく通楽団登校がなくなるらしい。回覧板が回ってきました。

婿方にて花供へしとふ吾子のメール吾も供へむけふは小晦日

森 厚子

婿方のコ列の墓の十七基供へし花は自家生と言ふ

日曜の午後の栄のオアシスに吾が心持ち異邦人のごと

竹島の八百富神社で、昨正月に大大吉をひいた息子が縁あって婿に……。お義父様は十三代目とか。幸あれ。

在りし日の証消すごと片付けは少しも進まずはやふた月過ぎぬ

水野 絹子

待つはずも無しと覚ゆる父の元旅立ちゆくと遺書を残して

まだ我は生きてゐるかと問ふ母の手を取り温ぬくさ確かめしものを

思いがけず仏壇の引き出しから出てきた母の遺書。「待つはずもない」という言葉に心をうたれました。

母と共にもち米とぎし年の暮れあかぎれの指水の冷たさ

牧原規惠

あれやこれなつかしきかな年の暮れ今はすつかり合理的にて
草もちを作らんがためヨモギ取り草々に追はれ隅に生ひけり

年の暮れになると義母のやっていた事のあれこれが続いています。これを次につなげて行けるかどうか。

要支援になりたる己が身なれども小さき抵抗杖はつくまい

稲吉友江

路地裏を歩めば野良猫ついて来て共に浴びたり初冬の夕日

野良猫よおまへも日暮れは淋しいか共に歩めり曲り角まで

思う様にならない足。歩行に不便で、杖を突かなければと思うも、心の中で情け無いという気持ちと葛藤しています。

春立ちぬつとめて明き閑かさやこゑくぐもりて雉鳩の啼く

大 武 智 子

ちちははの織りしに似たる縞木綿一反呉れて君は逝きたり

われの名をファーストネームに呼びくれき歌会果てて語らひのとき

初心の頃からの歌の先輩が昨年暮に亡くなりました。ひと月が過ぎた頃、挽歌が浮かびました。

現代学生百人一首

東洋大学

コロナ禍で誰かが居ない教室に慣れてく自分が何か悲しい

東京学館新潟高等学校二年 吉田 そら

朝起きて布団投げ出し洗面所女家族の戦が始まる

金沢大学附属高等学校二年 長野 好花

マスク時代目で感情を表現し私も一歩女優に近づく

上田西高等学校三年 篠原 百絵

カマキリの卵が地上10センチ今年の冬は雪が少ない

松商学園高等学校二年 星野 沙羅

なぜだろうみんなと違うだけなのに間違いないんじゃないはずなのに

川辺町立川辺中学校二年 加藤 葵衣

大掃除ほこりかぶった本棚に知らない本と父の歴史と

川辺町立川辺中学校二年 三品 明日香

淡々とありをりはべりいまそがり迫る睡魔に抗いながら

静岡県立下田高等学校三年 太田 果蓮

未来への地図がないまま歩き出す自由の苦しさ知ったこの夏

静岡県立下田高等学校三年 相馬 瑤

『俳句』

テレワークひと日暮るるや半ズボン
スーパ―のはじっこにあり草の市
待ちぼうけ慣れているなりサングラス

植村公女

終活が生き甲斐となる年の暮れ

木村歩歩

大吉が凶に寄り添う初詣

孫来ればいつもババ抜き炬燵かな

あかあかと月が膨らむ冬の街

行人も豊穰祈るとんと焼き

馬車鉄道走りし道や春の塵

今泉如雲

古地図に井伊家尾張家春の雪

春寒や床は大理石の廁

青空の下の隅田の福詣

矢崎直人

初春の墨堤歩き江戸の風

福詣洒落と機転の江戸の粋

初春の梅若ゆかりの隅田川

福詣スタンプラリーをととのへる

大河なるアマゾン河を小舟にて

今泉由利

気に入らぬことは静かにうやむやに

宇宙なる地球の存在考える

人間の出来得る力の上限を

始まりが続きいるまま終りへむかふ

消えゆくものあり残るものあり

私の今あることの事実あり

未知のこととは今からいつのこと

健やかに今いることを当然と

三十八億年前の海を探すと

冬日にも慈愛に満つる日の光

木風

元旦や大安吉日十三夜

めでたさや白装束の富士の山

屹立すかすむ青さに白き富士

酒置いて富士をながむる三が日

君が家笑つて笑つてお正月

餅やいてふりがなはない句集読む

お茶入れてシヨパン流れて冬日さす

山茶花の花びらひらり道のはた

よし乃

正月や一夜明ければ銀世界

元旦に年を重ねて何思う

紀山

ふる里の山で拝みし初日の出

郷泉

パソコンを替えて新年四苦八苦

ひとりでも母の味なる雑煮椀

春山

茶は冷めて一句もできぬ夜半の冬

正月の静寂破る工事かな

孝

三ヶ日弓矢の如く去りにけり

初詣今年の運勢神頼み

初バイト孫からもらったプレゼント

紀風

青空や渋柿一つ木に残る

カリンの実枝から落ちて庭先へ

秋風に孫のたよりもメールかな

年老いてデッサン続ける決意かな

初詣孫といっしょに「くじ」を引く

折々の詩(二十五)

ふじのけんじ

生きるちから

しのぶさん
あなたの人生は
いつも 精一杯のちからを
外に向かつて
発してきましたね

あなたの言葉の一音一音が
全身の力を使って
押し出していること
その言葉の重みを
あらためて 聞いています

力を抜いたり
ささっと流したり
本当はしたかったのに
からだが許してくれなかった

しのぶさん
あなたはいつも
水俣病胎児性患者の代表として
時には好奇心で見られ
時には拝め奉られ
時には排除され
その都度
孤独と賞賛と差別のあいだで
たたずんでいましたね

彼女に集まる人は いつか
彼女の下を去る 代わりを置いて
でも彼女は この役割を
誰かと代わることができない
その淋しさと誇らしさとを
全身を動かして 語っていましたね

しのぶさん
あなたの人生は
いつも 精一杯で
僕らはその姿を見て
生きるということのちからを
いただいています

(坂本 しのぶさんに捧ぐ)

五感を澄ませば (45)

杉浦 恵美子

尾張美術館ふたつ

最近続けざまに尾張地方の美術館を訪問。同じ県内でも三河と尾張は、方言ひとつにしても全く異なるように、文化の違いも歴然。

名古屋くらいまでは出かけることがあっても、尾張は殆ど未知の世界。

よって、出掛けて行くのは小旅行気分。

* 稲沢市荻須記念美術館

荻須高德が有名な画家であるのは承知でしたが、お膝元なのに行ったことがなく、ある日、思い付いて訪問。予備知識もなく最寄りの駅まで行けば何とかなるだろうとJR稲沢駅で下車。節約のためコミュニティバスを利用しようとする。出発は約50分後。寒空のバス停で待つのもと、少し美術館に近い名鉄国府宮駅まで歩き始めました。厳寒で、風をよける場所もなく、ただっ広い大地を

ひたすらテクテク。ああこれが尾張なんだなと。無事に美術館に辿り着いた時は、足を引き摺っておりました。

入場者は私一人だけ。ゆっくり鑑賞。荻須は、戦争の為にやむなく数年帰国した以外は生涯パリに暮らし、沢山の油絵もパリの街角の風景ばかり。数十年前のパリにタイムスリップしたような感覚に。アトリエも再現されていてどんなにパリに執着したのかと。

ただ如何せん、画家が活躍した時代はもうあまりにも遠く、パリそのものも当時は距離的に遠く、今日本には身内の方々もなく、寂寥感に捉われました。

さて、美術館を出て、馴染みの料理店に行きました。シェフがワンオペで切り盛りする小さなお店。

「さつき稲沢の荻須美術館に行っただんですよ」

「荻須さんですか。僕パリで修業時代に会ったことありますよ。もう晩年でしたが。彼は変わった人で、街の浮浪者と飲むのが好きで、しょっちゅう奢ってやっていたとか、葉巻を吸っていたので歯が真っ黒だったとか」

写真では取り澄ました感じの画家ですが、そういう生話を聞くと何か救われた気がしました。

*清須市はるひ美術館

荻須美術館で貰ったパンフにちょうど「辻邦生誕生百年 辻邦生と佐保子―ふたりが見つめた光」と云う企画展が開催されていることを知り、辻邦生は昔ある程度読んでいた為、親しみを感じ、翌週に訪問。しかし清須市というのは名古屋市のすぐ北に位置しているのにアクセスは荻須美術館よりもっと困難でした。

案内通りJR稲沢駅で下車、タクシー乗り場へ。一台もなし。タクシー会社へ電話すると、今出払っていますとつれない返事。仕方なくJRで手前の清須駅に戻り、またもやコミュニティバスを利用することに。駅から美術館まで直線距離ではほんの数キロ。なのにバスはあちこち寄り道するから40分もかかりました。でもお陰でこのバスは、乗客の生活弱者にとって大切な足になっていることがよくわかりました。スーパーで持ち切れないほど買物をしたおばあちゃんたち、赤ちゃん抱いたお母さん、施設に通う人など普段目にするのではない別の世界を覗いた気分。

企画展は、辻夫妻の、結婚前から交換した夥しい手紙、葉書、戯絵、旅行鞆など生前の暮らしが垣間見られまし

た。ふたりとも几帳面な性格らしく、葉書など細かな字体でびっしり書き込まれていました。

ところで辻夫妻と清須市とはどんな関係？

佐保子夫人は名古屋市長女ですが、戦災で実家が焼失したため、一時期近郊の北名古屋に住居を移していたことによる縁とか。

夫妻はおしどり夫婦としてよく知られていましたが、それ以上に西洋美術史家であった夫人から多大な影響を受けたからこそ、創作が進んだようなのです。

それぞれ才能ある夫妻が、共に暮らすことで更に高めあつて行かれたというのは、理想ですね。

中でも、夫妻が気に入っていたという巨大な二匹の熊の縫いぐるみが目を惹きましたが、大分へたつているうえ、持ち主も今はなく、下を向いていて、心なしか淋しそうでした。

美術館訪問すれば気付きたり背教者ユリア又ス未だ読まざるを

附録（四十五）

矢崎直人

青空の下の隅田の福詣

一月五日に「隅田川七福神めぐり」の吟行に行ってきました。「七福神詣」は、「七福詣、福神詣、福詣、一福」ともいい「元日から七日までに、その年の開運を願う七福神を祀る神社をめぐること。室町時代あたりから始めて江戸時代中期に盛んになった」『角川俳句大歳時記』そうです。

隅田川七福神は、多聞寺の毘沙門天、白鬚神社の寿老人、百花園の福祿寿、長命寺の弁財天、弘福寺の布袋、そして、三囲神社の恵比寿と大黒を巡ります。今回は、木母寺にも寄り道しました。時々曇りましたが、東京スカイツリーがよくみえて天気がよく吟行日和でした。

多聞寺の茅葺屋根の山門の大火震災戦火を遁れ

寿老人白鬚神社の大明神白鬚長寿の神に祀られる

福祿寿百花草花圃まれて百家の名跡絶ゆることなく

家光の腹痛治す長命寺井戸の薬に弁天の蛇

布袋尊咳の爺婆石像の風邪除け民の願う信仰
越後屋の大國恵比寿うつさされて三囲神社にめぐりつきたる
隅田川七福神の吟行で俳句を詠んで初春ととのふ



『弥生三月』

中屋保之

二十四節氣のひとつ「立春」は、旧暦で新しい年の始まりを意味したそうである。その前日が、季節の境目であることから「節分」となる。因みに、「立春」は、その日一日を指す場合と「立春」から「雨水」までの約十五日間を指す場合もあるという。今年は、二月四日～十八日がそれに当たる。新暦で過ごす現代人の我々でも「立春」と聞くだけで何となく暖かさを感じる事ができる。

が、今年の日本海側では「立春」を迎えても稀にみる豪雪に見舞われている。世に言う「三八豪雪（昭和三十七年十一月末～三十八年二月初め）」以来だとか。東京都内でも「立春」を数日過ぎた二月七日未明からの降雪で翌朝に5センチほど積もり春の訪れを遠ざけた。富山在住の従姉からは、ッそんなもん、雪のうちには入らん！ッと揶揄されている。そういえば、目指していた高校に断られた（早く言えば不合格）のも三八豪雪さんぱちの年だったのを思い出した。寒かったなあ…

とはいうものの、季節は移ろう。時は「春」を迎える準備をしている。過日旧友と訪れた皇居東御苑の一角には、蠟梅の香りがあり、木々の枝先には蕾が微かに膨らみかけていた。厳しい冬があればこそ春が愛おしい、灼熱の夏があればこそ清々しい秋が好ましい、ともいえる。

俳句二題

岳精

春ここに

天にも地にも 情けあり

「情け」とは、古語の「情^{なま}し」に由来し「心が引き寄せられる」「思いやりの気持ち^{なま}が自然と湧く」という意味を持つ言葉、転じて「なさけ」となり、平安時代にはすでに現代と同じような意味で使われていたとある。善き日本人の心^{なま}に優しさと思いやりの文化^{なま}を感じる。

一茶

春雨に

大欠伸する 美人かな

孟浩然の「春暁」に「春眠 暁を覚えず」を連想させる、とする説に賛同したい。とにもかくにも、「四季」が「二季」にならぬよう願う。

『酔いの徒然』（二六七） 丸山 酔宵子

『インド映画 プシユパ・覚醒』

令和7年のロードショー映画鑑賞は105本で、一月平均約9本。

令和8年の年頭最初のロードショー映画はインド映画の中でもインド中東部のテランガーナ州のテルグ語映画、いわゆる「トリウッド」の『プシユパ・覚醒』である。インドにはもう一つの映画産業地域があり、それはムンバイを拠点とするヒンディー語映画産業で「ボリウッド」と呼ばれている。「ボリウッド」とはボンベイ、現在のムンバイとハリウッドを組み合わせた造語であるが、驚くなかれ、映画製作本数では天下のアメリカ・ハリウッドを超え世界最大の映画生産なのである。

インド映画と言えば2022年日本で公開された『RRR』がある。これも「トリウッド」で、1920年代のイギリス統治下のインドを舞台に、自由を求めて2人の英雄の友情と戦いを描いた究極の上映5時間のイン

ド・アクション・エンターテインメント大作である。壮大なスケールのアクションシーンやエネルギー溢れるダンスナンバー「ナートウ・ナートウ」が世界的に注目を集め、インド国内外で大ヒットし世界興行収入は1200億円を超えたのである。

本作「プシユパ・覚醒」は『RRR』に劣らぬ4時間の超大作である。

物語は、レッドサンダルウッド【紅木紫檀（こうぼくしたん）】密輸を題材にした「アウトローの成り上がり物語」でありながら単なる娯楽アクションに留まらず、現代インドの社会構造、階級、暴力、欲望といったテーマを濃密に織り込んでいる。

因みに、レッドサンダルウッドは大変貴重な銘木で高級家具や日本では三味線に使われ、江戸時代より珍重されている。それ故か、本作品では、日本が重要な取引相手国となり、冒頭シーンでは、横浜の広大なコンテナヤードで大型コンテナから真っ赤なレッドサンダルウッドが取り出され、その中から主役の「プシユパ」が飛び出してきて「日本のやくざ」との壮絶なアクションシーンでスタートするのである。

物語の中心に居るのは、貧困層に生まれ、姓を持たないことで差別を受け続けてきた男である「プシユパ」。彼は自らの価値を証明するため、そして社会に刻まれた階級の壁を打ち破るために、密輸組織の中で、したたかにのし上がっていくのである。

プシユパは英雄ではなく、反英雄であり、倫理的に正当化される存在ではない。しかし、彼の行動の根底にある怒りと渴望は、観客に強い共感と緊張感をもたらすのである。

主演アッル・アルジュンの演技と超人的アクションが本作の最大の魅力と言ってよいが、表情の細やかさを両立させ、プシユパという人物の粗野さ、狡猾さ、そして脆さをも見事に体現している。特に、肩を揺らしながら歩く独特な「プシユパ歩き」は、日本の「やくざ」の、肩を怒らしてガニ股闊歩する姿に似ているが、キャラクターの象徴として世界的にインパクトを与えているそう
だ。

物語の構造は、インド映画らしい豪快さと緻密さが混

在している。前半は密輸組織の内部構造やプシユパの台頭を描くことで、その実態を丁寧を描いている。一方、後半では権力者との対立が中心となり、主人公の「存在証明」をより鮮烈に描かれる。

『プシユパ・覚醒』は、単なるアクション映画ではなく、階級社会に抗う男の生存戦略を描いた濃密なドラマで、主人公の野心と怒り、そしてそれを体現するアッル・アルジュンの強烈な存在感が、観客を強烈に惹きつける。監督スークマールは、商業映画の枠組みを保ちながらも、リアリズムとスタイリズムを巧みに融合させ、独自の世界観を構築している。本作が持つエネルギーと獨創性は圧倒的であり、インド映画の新たな潮流を象徴する作品として高く評価されるべきである。

本作「プシユパ・覚醒」は、続編の『プシユパ・THE RULE』への期待を高めつつ、インド映画の多様性と可能性を世界に示した圧倒的エンターテインメントの傑作である。

アクションと歌と踊りの初映画

酔宵子

昭和 子どもの四季

高橋 育郎

春は原っぱ 花摘みだ

レンゲ タンポポ 花ざかり

四つ葉のクローバー 見つけたよ

クローバーで 首飾り

編んでもらって うれしいな。

夏は水浴び 川と海

泳ぎ方 教えてもらったよ

おぼれないよう きをつけて

竹でつくった 水でつぼう

みんなで撃ち合い びしょびしょだ

秋はお月見 ススキをかざろう

まんまるお月さん ウサギが餅つき

おだんご おいしい 楽しみだ

風が涼しくなってきた

暗くなつたよ おやすみしよう

冬は雪降る 雪だるま

雪合戦は たのしいよ

寒さをとばして 汗をかく

裸になつて 雪まみれ

元気がいいな 拍手をしよう

もういくつ寝ると お正月

凧揚げ 羽根突き

餅つきの音

あちら こちらで 聞えるよ

たのしいな 楽しみだ

地球は一つ

高橋育郎

地球は一つ 世界は一つ

海は青く 大地はみどり

おお なんと美しいエメラルドグリーンのこの地球

まん丸い星よ この地球

十五夜お月さんも うれしそう

あんなにも美しい星を こわしたくありませんね

美しい星よ いつまでも美しく

この星をこわすのは 戦争

愚かな戦争はしてはいけない

人間の心がけ次第で 戦争は起きないのです

さあ 平和の尊さ ありがたさを学びましょう

そして この星を作った神様に誓いましょう

二度と戦争は 起こさないと

感謝をこめて誓いましょう

夕焼け小焼けで日が暮れて 山のお寺の鐘が鳴る
菜の花畑のあぜ道を お手々つないで 帰りま
しょう

カエルが鳴くから 帰りましょう

カラスと一緒に 帰りましょう

一番星見つけた 二番星に手を振って

さよなら さよなら またした

遠くに聞える鐘の音は

世界恒久の平和

いついつまでも 鳴らそうよ

絹の話 (5)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

遙かなるシルクロード

絹織物が中国で作られるようになって5000年にもなりますが、その製法は長い間秘密にされて来たと言われています。絹はナイロンが出来る迄、莫大な富みをもたらす戦略物資的な性格を持った物でした。

特に中国から西の中央アジアからローマにかけての興亡激しくも、豊かな国々へ贈り物として、交易品として、計り知れない政略と利益をもたらしていたと思われる。シルクロードに砦等が出来、整備されて来ると、唐の長安の都は絹がもたらす利益で華やくことになりました。後世日本でも昭和10年代前半の輸出総額の40%以上が絹であり、太平洋戦争に至る戦費調達に大いに役立つようです。戦艦大和は絹で出来た、と云う人がいます。

シルクロードは三蔵法師の旅のように非常に苦難と危

険な道程でした。ラクダの隊商もオアシスで中継ぎしながら荷物を送るのですが、途中これを略奪する賊があとをたたく、また隊商そのものが荷物と一緒に砂漠に消えてしまったりで、よほど利潤の高い交易でなければ割りに合わなかったでしょう。

それではクレオパトラのうす衣はシルクか？と云うことですが、定かではありません。一説にはマダガスカルやエジプト以南で採取されるゴノメタ蚕（野蚕）から作られた絹織物ではないかと云う学者もいますが、今日この地域でうす絹を織る技術的痕跡も無い事を考えれば、やはりフェニキアの商人が遙かシルクロードを経由して入手した物と思いたい。当時既に中国ではうす絹はおろか、錦織も出来ていた様です。

絹は権力者が美しく着飾る為ばかりではなく、桜蘭の遺跡から出土するミイラの様に、遺体を絹で被うと、絹が腐敗を防ぎ奇麗なミイラを作る為にも利用されていたようです。

西方の国々は絹が何から作られるのか長い間知らなかった様です。その秘密を知ろうと各国の王はあの手こ

の手で情報収集をしたようです。遂にカシユガルの王が中国の王の娘を嫁にもらう時、髪の中に繭を入れさせた、話は有名です。今日でもウズベキスタンは良い絹の産地で日本にも輸入されています。

4世紀には現在のトルコ、6世紀にはフランスに伝わってゆきます。

それでは絹の東進、日本へはいつ頃伝わったのでしょうか。縄文末期の土器等に絹らしき物の付着があるように、長江周辺から直接北九州に米より少し早く伝来したようです。

蚕が繭を作り、蛹が繭から出て、産卵するのに10日位、温度も湿度も似ている日本へは伝わり易かったけれども、道程が長く、乾燥地帯を短時間に運ぶ手段が無かった、と言った方が良いかも知れません。



初狩便り
(52)



花野みぷり



弥生やよい

初狩の寒く乾燥した冬は遠ざかり、弥生となった。弥生の「弥」はいよいよを表し、「生」は生い茂るという意味。少しずつ暖かくなり、気圧の不安定なこの時期は、待望の雨も降る。草木は寒さと北風から解き放たれ、「いよいよ生い茂る」。かちかちだった畑の土は、いち日ごと、ひと雨ごとに柔らかくなる。畑や畔には草が萌えだし、今年もオオイヌノフグリが一番に咲きだした。笹子川の水量も雪解水ゆきげみずを集めて、増えてきた。

春の日差しで、ビオトープに張っていた厚い氷が溶けだす。寂しかった水中に、いつの間にか、水草や藻がゆらめいている。冬の間、水底に潜んで寒さにじっと耐えていた泥鰌もカワニナもタニシも水面近くにながてきた。もう少し経てば桜が咲き、田に水が回り、蛙が鳴き出し、孵化した幼魚やオタマジャクシが泳ぐ姿も見られる。

山の木々は芽吹き始め、本当に毎日、色が変わる。冬が厳しかった分、初狩の春は、それはそれは美しい。農作業もスタートし、仲間も集まってくる。弥生は、わくわくする季節の始まりだ。

(写真 菅野昌英・矢野都紀子)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2020年2月2日

ラジオ体操のおすすめのきっかけ

北風が冷たく

寒い空気の中を歩いているとき

心も不自由なく 普通に歩いて

お天道様の光を浴びられる

なんとも幸せな気持ちになります

前回の

本田のひとり言 に書いた ラジオ体操ですが

「先生 ラジオ体操はどのなんでしょうっか？」

と数年前に患者さんから質問を受けました

そうです

ラジオ体操ブームが来た時期ありましたよね

ラジオ体操といえば

小学校の夏休みにやったのが最後で

それ以降 やる機会はほとんどありません

とりあえず やってみました

色々考え 感じながら 1年間365日やり続けました

ああ これは身体に効果があるな

とつくづく感じ 患者さんへの

お勧めへとつながります

シンプルで 手間とらず 時間も4分あればできる

よくできた運動方法です

1日の始まりに出来るといいですよね

今日も笑いながら楽しんで行きましょう

2026年2月11日

恵みの雨

昨晩から 久々の恵みの雨です

乾ききった空気を潤わせてくれ

湿度をあげてくれます

ありがたいですね

ただ

雨が降りますと 遥か上空を飛んでいる

花粉が雨と一緒に地上に落ちてきます

花粉症の症状が出やすくなりますので

引き続き花粉症対策をしていきましょう

それに加え

インフルエンザが再び流行しています

今回のインフルエンザはB型です

胃腸系に症状が出やすいタイプです

更に

ウイルス性胃腸炎も流行しています

インフルエンザにはアルコール消毒が効きますが

ウイルス性胃腸炎には効きません

本田カイロ流 指先を上にあけて

流水で流す手洗いをしっかりとやりましょう

今日も笑いながら楽しんで行きましょう

「健忘症（物忘れ）の予防」

健忘症とは 物忘れ
陡然として 或る事忘れ
心力つくして 思慮すれど
中々 思い出せぬ症
健忘起こす 要因は
三つの内臓と関係す
心は神明主り
精神・高次の脳機能
心気や心血 心臓が
安定してれば 血送り
聡明な精神を維持できる
脾の働きは 意を舍し
思考や想像・記憶など
情報処理を担っており
胃腸の栄養 脳に回して

頭の回路を維持している

腎は精を主り
精が育む 脳・髓を
養い維持して 神経の
細胞・可塑性 促して
脳の衰え 回避する
心や精神に余裕無く
頭に過剰な負荷かけて
精神・意識は落ち着かず
心血消耗 不眠となれば
機能は落ちて 健忘す
これを予防する 為に
頭の情報 減らした上で
運動 血流促して
食べる時には 咀嚼をし
しっかり睡眠 取れるなら
記憶の回路は維持される



「生き方五行 水性」

水性 水の気 精の働き
心身・生命を潤して

成長 促す働きで

やる気の源 原動力

動きを作りて 変化する

水は 川を流れる時

常に新たな水 運び

地形に合わせ 形変えて

母なる海へと 戻ってく

水は冷えれば 固まりて

温めることで 動き出し

止まらず動けば 澄んでいき

動かず停滞ば 淀んでく

気になることに 向かってき

一歩ずつでも 動くなら

生命の水は 温まり

人生流れて 澄んでいき

動いた後には 落ち着いて

生命の水を 冷やすなら

身体も心も 潤いて

本能 豊かさ取りもどす

やりたいことなど見出せず

同じ所に 止まりて

動かず ただただ受け身なら

生命の水は 冷えて行き

人生の流れは 停滞し

淀んで 心身不調となる

生命の水を 動かすにや

まずは外出て 動くこと

太陽浴びて 人と会い

温もり感じて ちよつとでも

心や身体が 温まりや

生命は自ずと 流れ出し

人生は潤い 取り戻す



三溪園の早春

殿山木風

名園めいえん一帯いつたい十分じゅうぶんに晴はれ

候鳥こうちょうの瑤池ようち 太平たいへいに満みつ

水みづに沿そう梅林ばいりん 春未はるいまだ浅あさく

素花そ数点かすうてん 啼鶯ていおうを待まつ

梅園早鶯(兼題) 於三溪園有作 令和七年一月

名園一帯十分晴 候鳥瑤池滿太平

沿水梅林春未淺 素花数點待啼鶯

(語釈) 三溪園：横浜三溪園。○候鳥：渡り鳥。○瑤池：綺麗な池。○素花：梅の花。

(通釈) 三溪園は晴れ渡っていた。池には多くの渡り鳥が目を楽しませてくれ、実に穏やかだ。

池に注ぐ小川のほとりには梅林があり、梅の花はわずかに数点咲くには咲いているが、鶯の鳴くのを聞くには未だ早い風情だ

※ 日曜日、空は青く晴れ上がり、珍しいほどに暖かい日だった。家に居ては勿体ないと家内と娘を車に乗せ出かけたが、三溪園は人気があるのか、絶好の天気は人々を寄せ付けるようだ。それにしてもこんなに混雑したことはないと云うほど、車は渋滞した。並んでいる車の最後尾に並んだ。車列は長かった。どのくらい待ったのか、やっと順番が来て中に入ることが出来た。

三溪園には渡り鳥が池にいる頃を見計らって、一人で年に一、二度は来てみる。

東海道歩き旅の時、新幹線で知り合ったクラウン博士ご夫妻を仲間と共に案内し、散策した事も良い思い出だ。癒やしの三溪園だ。「ミスター横山の友人は皆素晴らしい人達ばかりだ」と言ってくれたが、吟の精神でお付き合いした事を自覚した。あの時は記念館でお茶を戴いた。館内では原三溪の書を始め簡単に観覧する。後は私の楽しみ、鯉と渡り鳥に餌やりだ。何時も同じ事をやっている。家内と娘も付き合った。園内で交歓吟など催したらどんなに良いものかと思っている。

Much of the colonial-era fare is still on the menu although not, unfortunately, the Silvana cake. Since 2023, an expansion campaign has spread Flury's reach beyond fashionable Park Street. Flury's heritage chocolates can now be delivered across India within 72 hours.

Closer to me, I have learnt a Bäckerei Flury is a short train ride

away. The family-run bakery has served customers north of Bern, the Swiss capital, since 1933. They make no mention of Calcutta, but their motto is compelling: 'Simply delicious'.



時の輪廻

FLURYS

私の子ども時代で最も幸せな記憶のひとつは、9歳になった年のことで。国際便で届くはずのケーキ箱を心待ちにしていた。それは、移動の多い私の育ちを象徴する出来事でもあった。誕生日パーティーは軍事クーデターによって中止された。無血クーデターだったとしても、幼い私には人生の理不尽さを和らげる理由にはならなかった。

叔父と叔母は、当時私がいちばん好きだったカルカッタのフルリーズのケーキを約束してくれた。シルヴァーナ・ケーキが大好きだった。繊細なビスケット生地の上に重なるチョコレートの層。そのケーキが45分のフライトでダッカへ運ばれてくるのを想像するだけで、胸が高鳴ったのを覚えている。

実際に食べた記憶はないが、ひと切れの姿は思い浮かぶ。冷蔵された表面に、湿度の高い空気で生じた小さな水滴が光っていた。

この話を、いま暮らしているチューリッヒで語ったときのこと。そこで初めて、Flury (フルリー) がスイス・ドイツ系の古い姓で、火に関わる職業の守護聖人フローリアンに由来する短縮形だと知った。私の幼い日のケーキは、1927年にティールームを創業したスイス人夫婦、ヨーゼ

フとフリーダ・フルリーに行き着くのだという。すでに英領インドの首都ではなかったとはいえ、カルカッタの高級パークストリートに構えた店は、英国人、ベンガル人、ユダヤ人、アルメニア人、パールシーの裕福な家族、さらには少なくとも一人のボリウッドの大スターに愛されてきた。

けれど、それでも郷愁は満たされないかもしれない……。

ジャーナリストのパチ・カルカリアは著書の中で、1965年、スイスへの帰国を考えていたフルリー夫妻が偶然の路上での出会いをきっかけに、店をアピージェイ・スレンドラ・グループへ売却することを決めたと記している。

植民地時代からのメニューの多くは今も残っているが、残念ながらシルヴァーナ・ケーキはない。2023年以降、フルリーズはパークストリートを越えて店舗を拡大し、伝統のチョコレートは72時間以内にインド全土へ配送されるようになった。

そして私のすぐ近くには、列車で少しの距離に「ベッカライ・フルリー」があると知った。ベルン北部で1933年から続く家族経営のベーカリーだ。カルカッタへの言及はないが、掲げられたモットーは力強い。

「ただ、ひたすらにおいしい。」

Circles of Time

Atiya Hussain

One of my happiest childhood memories is from the year I turned nine. I was anticipating international delivery of a cake box, as clear evidence of my peripatetic upbringing. My birthday party had been cancelled by a military coup. That it was a bloodless coup did not make any difference in my child's mind of the profound unfairness of life.

My uncle and aunt had promised my then-favourite cake from Flury's of Calcutta. I loved Silvana cake, its chocolatey layers atop a delicate biscuit base, and I can still feel the joy of anticipating the cake accompanying them on the 45-minute flight to Dhaka.

I can't remember actually eating the cake, but I can picture a slice, the chocolate shiny with tiny drops on its refrigerated surface, condensation from the ambient humidity.

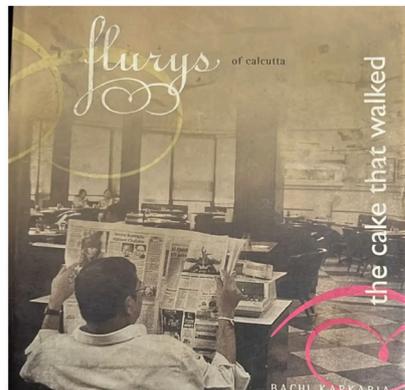
I was recently re-telling this story in Zürich, the city I now live in. That's when I learnt that Flury is an old Swiss-German name, a shortened form of Florian, the patron saint of professions that work with fire. It turns out my childhood cake can be traced



back to Joseph and Frieda Flury, a Swiss couple who founded the tea room in 1927. Although Calcutta was not, by this time, the capital of British India, Flury's posh Park Street address sustained a cosmopolitan and glamorous clientele of wealthy British, Bengali, Jewish, Armenian and Parsi families, and the committed fandom of at least one of Bollywood's leading men.

But that might not sate nostalgia either ...

The Indian journalist Bachi Karkaria recounts in her book about the Calcutta institution that in 1965, when the Flurys were contemplating returning to Switzerland, a chance meeting on the street led Joseph to agree to sell the patisserie to the Apeejay Surrendra Group.



編集室だより【二〇二六年三月】

今泉 由利

歌集「地球にて」

大根を干に刻みて落付きぬアルゼンチンにてもアメリカにても

日本語の適切な言葉みつからず英語の仮またスペイン語のまま

ねむの木の木影に赤き車止めてメルローズ街の人等に混る

テキーラの入りてカクテルマルガリータ飲みつつ見るは白粉の花

キラキラの塩の結晶華やぎてマルガリータに肩ほぐれ来つ

梅の雨降りいるユース聞え来つ砂漠の国に目覚めたる時

もう少しもう少し地球にいて下さい命のことに欲深くなる

アメリカのモデルに向う朝のとき言葉の要らない世界に籠る

七月の外気の暑さ知らぬままカリフォルニア住いおろかよおろか

エアコンに75度とセットするひねもす我家の温度は75度

日本にもあるよと言いつつヴィドフランスのフランスパンの朝食

左よりのライトに照らす米国のモデルの足は伸び伸びと長い

アトリエのルネッサンスへ急ぐ砂漠の山々連なれる道

百日紅今盛りなる道をゆきて真冬の国へ旅立たむとす

半砂漠カリフォルニアを楽しめる活字読みおりカリフォルニアにて

しつとりと空気が優しきブエノスアイレス吾は忽ちこの国人なり

仮住みのロサンゼルスより来てアルゼンチンの我家カーテン大きく開く

種の多きマンダリンを懐かしみアルゼンチンの日々過しおり

父母を思うリズムの戻り来ぬアルゼンチンの十日ばかりに

手に受くる如く数多の星の中を翔びてゆくなりアンデスあたり

星の中飛びゆく時はスペインのシエリーの酔いに身を任せつつ

コーヒーを飲みつつ細き下弦の月と並びて暫くわれ飛びてゆく

冷んやりと砂漠の朝の新しき空気を吸えり私の日々

紅く咲くブーゲンビリアに近寄りて車を止めぬ由野の新学期

星々が勝手気ままに動くようロサンゼルスの夜空の飛行機

風邪の咳二つすることにわれ思う日本の父よ日本の母を

マイルという単位の国に來たり住みマイルの単位になりて暮らせり

秋の日になりたることが話題にてヘーゲルの朝の慌しきなか

朝の日がカウチ辺りを過ぎし頃カーテン開けて秋の日となる

自らに出來得ることの小さきを悲しみており秋という日に

人間と生れて人間を生み育てこのごろ淋しさつりきたれり

やさしかる花々飾ることもせず砂漠らしく暮してしまふ

常にわれは見知らぬ人のテールランプ追いかけて追いかけて今日も一日

飛行機は九百キロのスピードにて我が母の国の日本へ向かう

刈り株にまたの緑の日本の田圃に我が乗る飛行機の影

成田より來たれる足にまつられる金線草の穂父母の庭

まず香る金木犀を見上げつつ御津の子われは海苔粗朶思ふ

抽出しに蛹かこいて我が部屋に紋白蝶の数多飛びし日

母に近くもつと近くと布団敷きて幽かに酸素の音聞えつつ

三角の種蒔きである父の辺にわれうろろと幼子のごとく

鳥達と競うごとく柿を食う鳥のつきし穴ある柿を

まだ青き細葉小僧の生け垣に沿いて歩めり昔のままに

乗り継ぎて車飛行機新幹線羅府より御津までの十六時間ほど

日本と羅府の時差に我が旅の所要時間は0となりおり

ぬくぬくと秋の日差しは雲の上日本へ向けて飛びゆくときに

雲ばかり雲ばかりなり十時間太平洋を飛びこゆるとき

日本人の暮しがわれの景色なり新幹線でひた走るとき

白粉花のまろまろ黒く実りおり曾祖母からの続きし続き

柗の香る二枝背のびして折りとる母の辺に飾らむ

雨降れば濡れ色うれし風吹けば葉の音よろし父母の庭

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三・四五・三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ 090・8434・8646
TEL 03・6765・5838
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail imayurizm@gmail.com
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。
- ◇令和八年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。
- ◇編集・発行 今泉由利